Libro de Alexandre (III)

Translated by OTA Tsuyomasa

Abstract

The "Libro de Alexandre" is a great epic poem that consists of 10,700 lines and was supposedly written in the first third of the thirteenth century. This poem is not an ordinary biography of Alexander the Great, because the story is interrupted by many diverse and various episodes like that of the Trojan War, which historians say took place in around 1200 BCE. Alexander the Great is a personage of the fourth century BCE, and this poem was written by an unknown Spanish author, perhaps a cleric, in around 1250 AD; so, a mixture of ages is seen throughout, and that is the most remarkable characteristic of this epic poem. This work was written in the erudite form of *cuaderna vía* (fourfold way), a style that has been called *mester de clerecía* (scholars' art) as compared with *mester de juglaría* (minstrels' art). This translation is made from strophe 400 to 593.

アレクサンダーの書（Ⅲ）

太田強正　訳

アレクサンダーの書は13世紀の最初の約30年の間に書かれたと推測される10700行からなる大叙事詩である。

これは33歳で早世したアレクサンダー大王の伝記であるが、普通の伝記とは異なり、大王が活躍した紀元前3世紀、トロヤ戦争が起こったと言われる紀元前約1200年、そしてこの叙事詩が書かれた紀元後13世紀の話が混然として描かれている。

作者は無名の聖職者であろうと言われているが、Gautier de Châtillonの Alexandreis を底本として、その他の伝記、伝承を基にこの叙事詩を書いたようである。

作品はメステル・デ・クレレシーア（mester de clerecía）と呼ばれるもので、中世スペインの主に聖職者による教養階級の文学の流派のものである。これは文字の読み書きのできない吟遊詩人（juglares）によるメステル・デ・フグラリーア（mester de juglaría）と対をなすものである。

形式はクアデルナ・ビーア（cuaderna vía）と呼ばれる1行14音節同音韻4行詩である。

今回は第400連から第593連までを掲載する。

訳は言葉が違うので韻を踏ませることはできなかったが各行ごとに付けた。そのため日本語として通るように原文にない接続詞などを補わなけれ

ばならない箇所があった。

人名・地名などの固有名詞は原則、原文に従いスペイン語読みとし、日本で普通用いられているものについてはそれに従った。

翻訳に当たっては現代スペイン語訳の他、英訳を参照した。また部分訳ではあるが日本語訳も参考にした。

400　知らせが王の下へ届くと、王を怒らせました
商人が不実な偽者だと分かったのです
王は他の事はすべて置いてギリシャに戻ると
宮殿が荒らされているのを見て憮然としました

401　彼は貴族たちとその血筋の者たち全員を呼び集め
涙ながらにその憎悪を語りました
《聞いてくれ―と王は言いました―友たちよ、私は不幸を背負って生まれた
もし私が復讐しなければ、自分を不幸だと思うだろう

402　親類の者たちそして友たちよ、我らの主によって
大きな苦しみにお前たちが心を痛めるように
偽りの裏切り者に復讐しに行こう》
全員が彼に答えました：《喜んで》

403　皆声を一つにして、あたかも兄弟のように
両手を上げて王に誓いました
病気でも健康でも決して彼に背かないだろうと
トロヤの城壁を破壊するまでは

404　この保証を得て心が決まり
彼は種豚にするように火と炎を注ぎ
自分と同世代の大軍勢を招集しました
復讐のためには出費は苦になりませんでした

405　占いによると、次のような事でした
十年以内にはトロヤを落とすことはできないだろうと
そして十一年目まで彼らはそこにいることになるだろうと
しかしその前に多くの血が流されることになるだろうと

406　よく当たる占い師カルカスは
一匹の蛇が二羽の鳥と争うのを見ました
子鳥が八羽いて、蛇が殺そうとしていました
しかし結局二羽の鳥はそれらを守ることはできませんでした

407　子鳥たちを殺すと、蛇は親鳥に向かい
二羽とも歯で首を引きちぎりました
するとカルカスはギリシャ人たちに言いました
《あなたたちは重大な前兆を見ました、すべて心に留めておきなさい

408　獰猛な蛇はギリシャ人たちに示しています
鳥はトロヤ人で、彼らは軟弱です
数は辛い包囲の年数です
あなた方はこれが本当だということを確に知るでしょう》

409　別の神託が彼らに理解させました
アキレスがエクトルに勝つだろうと
結局アキレスがそこに留まることになるだろうと
なぜならそうならないと彼らはトロヤを奪取できないだろうから

410　アキレスの母は非常にずる賢い人でした
というのは占い師で予言者でしたから
彼女は知っていました、もし自分の息子がこのような事態の渦中にあったら
何らかの原因でその地で死ぬことになるだろうと

411　アキレスが子供の時魔法をかけて
槍が刺さらないようにしました
そして彼を女子修道院[42]に入れ
探しても見つからないようにしました

412　すべての修道院でアキレスの捜索が行われました
調べられない場所はありませんでした
しかしベールを被って変装していたので
見つけることはできませんでした、容易なことではなかったのです

413　ウレクシスは大きな策略を考えました
アキレスが修道院にいるのかどうか知るために
人々は言いました、ウレクシスが計略でもめぐらさなければ
アキレスは修道院からでてこないだろうと

414　ウレクシスはリボンやベール、シャツや靴
鏡や指輪、このような他の安物などと
一緒に弩や盾や槍を取り
贈り物として修道女たちに与えました

415　修道女たちは各々気に入ったものを選びましたが
アキレスは武器からは目を離しませんでした
槍を振り回し、盾を手に取りました
すぐにウレクシスは彼かもしれないと言いました

416　人々はすぐに彼を捕らえて、他の服を与えました
彼を注意深く扱い、風呂に入れました
アキレスの母は騒ぎ立てましたが
彼女の妄言はすべて全然役にたちませんでした

417　アキレスにはとても愛していた恋人がいました
彼女を見る誰もが美人だと思いました
アガメンノン王は彼女が外見が良いので
アキレスから彼女を取り上げました、不当な事でしたが

418　アキレスは心が挫け、侮辱されたと思いました
王が彼をひどく恥ずかしめたからです
堪えようとせず、怒って王のもとを去りました
奪われた男として王に戦いを挑み始めました

419　非常に大胆に彼に戦いを挑み

家臣の非常に多くを殺すことができたので
ホメロスが言うように、大げさでなく
死者がどのくらい出たか数えることができませんでした

420　死体が切り株の間に藁のように置かれていたので
覆いを掛けることも死装束を着せることもできませんでした
人々はそれらをカミソリが毛を剃るように運んで行きました
戦いが長引けば彼の軍は滅んでしまったでしょう

421　男たちは全体会議を開いて
王に言いました、《王様、あなたは不利です
軍は損害を受けていて、あなたは関心を払いません
もしあなたが婦人を返さないなら、私たちは考えを変えます》

422　王は渋々婦人を返しました
アキレスは彼女を取り戻すと、すっかりおとなしくなりました
戦争は平和に代わって、―悪魔にはとてもこたえました―
それ以降アキレスは恐れられるようになりました

423　そこに卑劣で口汚い男が一人いました
不実で傲慢で卑しく無礼な男でした
テルシーテスという名ですが、彼が不運に見舞われますように
この男が不快な事を言いました

424　《皆さん―と彼は言いました―、私たちは何を争っているのでしょう

他の者が利益を得て、私たちは苦しむことになるでしょう
結局私たちは褒美は全然もらえないでしょう
私を信じる気があるなら、私たちが帰ることを私は望みます

425　ことわざでよく言うように
会議では一人の悪人がより多くの害を与えることができるのです
十人の善人が成し遂げる事よりも
そこではもう少しでそうなるところでした

426　大部分の人々はテルシーテスを信じました
すべての人は帰りたいために動かされたのでした
ウレクシスは怒って彼に大げがをさせました
テルシーテスと同族の人々は愚弄されたと思いました

427　人々は集団に分かれて、殺し合おうとしました
騒動は大変なもので止めることはできませんでした
皆武器を求めて戦おうとしました
悪魔がその種を蒔こうとしていたのです

428　年配で、非常な知恵者の善人がいました
とても年を取っていてチーズのように色白な人で
どこに行ってもいつも歓迎されました
判断においては秤のように公正な人でした

429　ネストルという名で、長年生きていました
皆が彼に注意深く耳を傾けました

彼は騒ぎを見ると心が痛み
磨き上げた杖を持って中に割って入りました

430　彼らを激しく叱りつけ、杖で叩きました
皆恥ずかしくなって剣を収めました
彼は人々に静かにするように言いました
そして彼らはバカなことをしており無分別だと

431　気違いじみたことを言ったテルシーテスを叱り
とんでもないことをした他の者達を咎めました
彼らに言いました、《ああ、友たちよ、お前たちは誓いを良く覚えてない
王がお前たちにその苦悩を語ったときお前たちは王に誓ったのだ

432　占い師のカルカスはよく当たりました
私たちはアキレスを見つけることができたのです、神に感謝[43)]
私たちの恥を雪ぐ準備はちゃんと整っていました
しかし悪魔は今私たちの邪魔をしようとしています》

433　ネストルの言うことは当を得ていたので
人々の熱狂はすっかり収まりました
彼は完璧な知能の持ち主と思われ
それ以降恐れられ、愛されました

434　翌朝、夜明けに
王は軍に布告するように命じました

天幕を畳んで、軍旗を移動させ
船とボートで海に出るようにと

435　もし創造主が私を助けることをお望みなら
私はお前たちに王子たちの名前を告げよう
メネラオと共にトロヤを包囲しに行った王子たちの
そして各々がどれでけの船を奪取し得たのかを

436　ペネレオ王子と貴族ラエレテス
強者アルケシラオ、プレテノルそしてボエテス
皆親戚で、資産家でした
そして兵士で一杯の五十槽の船を伴っていました

437　名前をアガメンノンと言うギリシャのもう一人の王は
この二倍の完全装備の船を持っていました
しかしこれらすべてに対してメナロン王子は
アガペノンと同じくらいの六十槽持っていました

438　白髪の老人ネストルは
お前たちに言ったように的確な助言をしていた人ですが
兄弟だとすぐ分かる二人の息子と共に
トロヤ人たちに損害を与えるために三十槽の船を伴ってやって来ました

439　二人の非常に高潔な人物アスクラドゥスとピストプスは
平時には非常に忠実で、戦時には非常に恐るべき存在なのですが

三十槽の用意のできた兵士を乗せた船と共にやって来ました
―すべての中でこれ以上勇敢な者たちはいませんでした―

440　プリペテスとレオンタスは、両者共勇敢なのですが
優れた兵士を乗せた三十槽の船でやって来ました
エステレヌスとスリピロはディオメデスと共に
もう三十槽の船で彼らだけでやって来ました

441　エスカラフスは忠実な仲間であるテレマノンと共に
ホメロスが言っているように三十槽でやって来ました
アヤスは一人で四十槽引き連れ
ウリクセロの息子はもう四十槽引き連れて来ました

442　修道院に籠っていたアキレスは五十槽の船を一杯にしました
すべての中で彼よりも優れた者も同等の者もいませんでした
彼は水から生まれ育ったのでした
風は彼に有害なことも不都合なこともしませんでした

443　タサリアの二人の息子アンティフスとペリオフスは
イタリア人たちに対して三十槽の船で出掛け
テウセルとトリトレムスは貢ぎ物として六槽を送ってきて
トロヤの人々にひどい損害を与えようとしていました

444　二人の忠実な臣下ロディウスとエウメレヌスは
兵士で一杯の十一槽を伴い
テラモンの息子アヤクスは長官の一人でしたが

十二槽以上は出してきませんでしたが、これらは非常に大型のものでした

445　アストロフスとテストルの息子であったもう一人
エウベウスとメヘス、ドゥリクイウスとアルペノル
テラムスとアスカラプス　　アンテノルの息子トアス
これらの者たちはテレモルと共に準備のできた十槽の船で参加しました

446　狡猾なウリクセスは 12 槽で
三番目のアヤス[44]はもう 12 槽でやって来ました
力溢れる体を持ったオルディフェネスは
二十二槽を用意しました―彼は優れた戦士でした

447　イドメネスとメリオンは二人ともクレタの出身で
彼らだけで六十槽もたらしました
モネタの息子はもう六十槽でやって来ました
―この男は文書が言っているようにアテネの出身でした―

448　アンフィマクス、アルピヌス、ポリクセヌスとオタス
彼らはすべてよく準備された三十槽でやって来ました
プロテシラオはポダルコと共にたった七槽で
フェトンタスの息子も同じだけでやって来ました

449　三人のアヤスについて私達は話しましたが、もう一人そこにいました

彼は騎士で一杯の四艘を持参しました
病人を治していた医師であるポリダリウス王は
マカオンと共に三十艘で航海してきました

450 これらはギリシャから来た王子達でした
しかしそこには名のない他の者達がいました
彼らはある者は一艘、他の者は二艘と大変な数の船を持って来たので
千二百艘には十四艘が届かない数になりました

451 彼らは上機嫌で無事に港に着き
錨を下ろして平地に陣取りました
両手を上げて神に感謝を捧げ、
疲労困憊していたので、休息することにしました

452 まだ彼らは港から離れてはいませんでした
その時トロヤの良き王のところに伝言が届きました
ギリシャの大群衆が押し寄せてきたと
そして怒り狂ってトロヤに向かっていると

453 この事は王に夢のことを思い出させ、非常な恐怖を抱きました
王の大きな心は縮んでしまい
会議の招集を布告するよう命じました
このような重大事に助言を得るために

454 エクトルは父に言いました：《安心してください、

あなたは良い息子と十分な臣下を持っています
私たちは彼らに立ち向かって行って、彼らの正面に立つでしょう
彼らは決してこんなに苦いぶどうに出会ったことはないのです》

455　勇敢で非常に忠実な良き戦士は武具を身にまといました
肌に直接絹地の胴着をまとい
上から水晶のよう輝く鎧をつけました
《息子よ―と父は言いました―、神がお前を災いから守ってくださるように》

456　非常に良くできた肩当をつけ
しっかりと巻かれた鋼鉄の輪がついていて
それらはしっかり留められており、非常によく調和していたので
布から取った靴下のようでした

457　そして跪いて剣を身につけました
―それを手に入れたいと望む者は買わなかればならないでしょう―
鎖頭巾と薄い下頭巾を身に着け
上から素晴らしい作りの兜をかぶりました

458　エクトルは彼の美しい、俊敏な馬にまたがりました
それは非常に良く装備の整った、並外れた力の馬でした
彼は槍を手に取り、盾に腕を通しました
彼を恐がらなかった人は良い戦士でしょう

459　トロヤの良き民衆は直ちに準備しました

愛情を持って進んでエクトルと共に出陣しました
町の外の牧場(まきば)に天幕を据えると
全住民がそこにやって来るまでになりました

460　彼と共に非常に見目麗しいパリスも出陣しました
彼は民衆にとっては悪い時に生まれました
書物が言うように、そこには他の多くの者がいました
素晴らしい王子たち、彼らは皆高貴な生まれでした

461　非常に多くの良民がそこに集まって来たので
運命が彼らにとって悪くなければ
ギリシャ人たちからトロヤを守り
こんなひどい事にはなっていないでしょう

462　決してじっとしていられない悪魔は
散々引っ掻き回すことができたので
軍勢を配置して
お互いに直に見えるよにしました

463　パリスは自分がどんなに勇敢か見せるために
そして恋人を満足させるために
自軍を出て、先頭に立ちました
あたかも前線を引き受けるかのように

464　パリスは偶然彼を見ました、悪魔が見せたのです
彼がその妻を奪ったやもめメナラオ王です

この不幸な男はひどく懲らしめられることになりました
あたかも熱い鉄が彼を焼いたかのように

465　エクトルが振り向いて彼がやって来るのを見たとき
ギリシャ人たちが彼を追ってやって来るだろうと思い
急いで拍車をかけて彼を迎えに出ました
軍勢に大きな音が響き渡りました

466　しかし彼がいかにして進み出たのか
またメナラオを見ただけで逃げ去るのが分かると
彼に哀れみを感じていたこともあって、ひどく怒り
もう少しで怒りで彼に襲いかかるところでした

467　エクトルは怒りの言葉で彼を非難し始めました
エクトルは彼に言いました：《あなたの良さもここまでだ
あなたは敵を求めながら、槍の攻撃から逃げた
あなたは味方すべてをひどく辱めた

468　レスリング場では、あなたは私たちすべてを負かしていて
同等の者が見つからないだろうと考えていました
あなたが夫人を奪ったときは、こんなことは考えていなかった
その時は彼女の前で大きな手柄をたてたのです

469　事は成りません、なでつけた髪と
美しい目と金色の履物とでは
必要なのは硬い拳と勇壮な顔です

槍も剣もお世辞は効きませんから

470　誰もこの事が正しいとは思いたくないでしょう
あなたが彼女と寝るために、私たちはここで戦います
しかしあなた方二人で戦って、始末をつけることを考えなさい
婦人を持ち去るべき者が彼女を持ち去るように》

471　パリスはエクトルに言いました：《あなたは十分に私を非難してくれました
あなたは私から十分復讐されるべきだと思います
他のことは言いたくありません、あなたの言ったことで十分です
あなたがした判断を私は受け入れます》

472　エクトルはこの事をギリシャ人たちに伝えました
メナラオは喜び、満足しました
双方によって取り決めがなされました
すぐに場所と日付が決められました

473　この取り決めは皆をとても喜ばせました
人々は紛争は解決したと思い
お互いに忠誠と友情を誓いました
それは決して破られることはないでしょう

474　両軍は各々丘の上に陣取りました
近すぎず遠すぎず
各々は自分たちの聖人たちを満足させるために

犠牲を捧げるため家畜を殺しました

475　彼らの真ん中に美しい谷が横たわっていました
そこには多くのウサギが住んでいました
皆が良い考えだと認めました
そこでメナラオとパリスが相対するのが

476　ギリシャ人メナラオは知恵者として先陣を切りました
恥ずかしさと怒りが恐怖心を取り去ったからです
非常な価値のある武具にしかっり身を固め
良き戦士として戦場に飛び出しました

477　もう一方の側からパリスが馬を走らせで出てきました
新品の武具に身を包み、軍旗を振りながら
対決しようとメナラオめがけてやって来ました
自分の偉大さを大声で叫びながら

478　メナラオがパリスを見ると、大声で言いました
《来たな、いまいましい客人め、一族の災いが
お前は笑いながら強烈な蹴りを入れてくる
お前が私にした事でお前が喜びを感じているとは思わない

479　私はお前を家に招き入れ、儀礼を尽くした
お前はこれ以上ひどいものがない褒美を私にくれた
しかし私は我らの主を信じ、信頼している
主は私に裁きをしてくださるだろう、この偽りの裏切り者めが》

480　メナラオは盾で身を覆い、槍を構えました
パリスを裁き、復讐したかったのです
全く恐れず彼に戦いを挑みました
できれば仕返ししてやりたかったのです

481　パリスが彼が敢然とやって来るのを見たとき
できれば喜んで自分を殺すだろうと思いました
パリスは目立つ軍旗を彼に刺すために立てました
しかし神はそれを望みませんでした、まだその時ではなかったからです

482　彼らは盾を間に激しく攻撃し合い
握っていた槍を折ってしまいました
両者の槍は裂けて落ち、粉々になりました
双方の陣営が鋭い叫び声を上げました

483　パラスがパリスに対決したので
彼女はメナラオの傍をいつも固めていました
何ももらってはいませでしたが、ビーナスはもう一方の傍を固めていました
できる限り自分の僕(しもべ)を助けようとしようといていました

484　両者の盾は粉々になりました
頑丈な鎧をつけていたのが幸いでした
二手に分かれてお互い対峙しました
攻撃に際して互いに憎しみを抱いているようでした

485　メナラオは一撃を喰らったときのことを思い出しました
槍を失ったなら、剣があります
剣を手に取り反撃しました
彼が来たとき、パリスは自分のを抜いていました

486　メナラオは鎖頭巾の上からパリスに斬りかかろうとしましたが
正確に当たらず、一撃がそれました
彼は誤って空を切ったのです
剣が手から外れ無防備になりました

487　ギリシャ人たちは負けたと思い
皆不運を嘆いて声をあげました
パリスは騒ぎの中で呆然として
この不幸な男は彼を攻撃することができませんでした

488　メナラオは苦しくてでどうすればいいのか分かりませんでした
しかし神が助けようとしてくれて、策略を思いつきました
彼の兜の下に手を入れることができたら
神の助けで彼を打ち負かすことがだろうと思いました

489　彼に向かって行き、剣で押さえつけました
運良く兜の紐に手をかけることができました
ひどく締め上げたので、苦しくなって
パリスは何もすることができませんでした

490　しっかり押さえつけ、それから引っ張っていったので

少しずつ紐が張り詰めていきました
引っ張れば引っ張るほどパリスは苦しみました
紐が彼をますます締め付けていったからです

491　メナラオは正しい裁きを下していたでしょう
パリスを死に至らしめるか連れ去ったとしたら
しかし他の者が彼を助けて、メナラオの手から救い出しました
そして人々は散々な目にあって痛々しい彼をトロヤに連れ帰ったのです

492　エレナが彼を見ると、少し責めて
全く気が触れたと思ったと言いました
彼女が知らないところで騙されたのだと
もしそうでなければメナラオと一対一で戦いはしなかったろうと

493　彼女は言いました：《もしあなたが彼がどんなに良い騎士か知っていたら
先頭に立って彼に向かっていくなんて大いに躊躇したでしょう
むしろ彼との間に大きな丘を置くべきです
というのは彼は非常に勇敢で、極めて優れた戦士だからです》

494　パリスはエレナ言いました：《私は誓っていうが
メナラオは力でも術策でも決して私に勝てなかっただろう
しかしパラスは私を負かした、私を激しく憎んでいるので
なぜならビーナスがリンゴをもらうに値すると私が言ったからだ

495　しかし私は忠実なビーナスを信じていて
彼女に私の不幸がのしかかっいるのをよく知っているので
私は彼の体に戒めの印しを残そう
いつもギリシャでそのことを印しとして話すように

496　このような状況でメナラオは怒っており
実にひどく怒り狂っていました
彼は準備していたことを果たすように命じました
そうしなければ大惨事になると

497　トロヤ人たちが出て来て彼を論争に巻き込みました
ある者たちは言いました《エレナを引き渡そう》、また他の者たちは《いや、だめだ》と言いました
神が望まない時には、合意は生まれません
悪魔がうまく分裂させることができたのです

498　どうするのか争いが解決する前に
―トロヤ人たちは不正なことをしてメナラオを侮辱しました―
射手のパンダルスが、神が彼に不運を与えたまんことを
もう少しでメナラオを殺すところでした

499　矢を放つと彼の脇腹に当たりました
メナラオは言いました：《これは良くない知らせだ》
彼はひどく驚いてギリシャ人たちのところに戻りました
味方は彼を生きて取り戻したなんて信じませんでした

500　ギリシャ人たちは自分たちが皆痛めつけられたと思いました
トロヤ人たちが自分たちを辱めたと思っていたのです
《もう―と皆が言いました―私たちは死んだ方がましだ
こんなに何度も辱めを受けるよりは》

501　皆トロヤ人たちに向かって大胆に向かって行きました
皆旗を立て、戦列を整えました
埃が一面に立ち上がり、大きな叫び声があがり
二日たっても轟音が聞かれました

502　ギリシャ人たちはトロヤに入城するために大胆に前進しました
パリスを吊るし、エレナを焼き殺し
他のすべての者を捕らえ、町を壊滅させるために
そこに誰も決して住めなくなるように

503　トロヤの者たちは言いました：《有り得ないことだ
外へ出て、まず見てみよう》
エクトルが全軍と共に彼らのところに出て行きました
戦いが起こり、混乱が生じました

504　両軍から多くの大きな軍旗が振られました
戦いが野戦になりました
このようにして戦場全体に血が流れました
あたかも牧場（まきば）か泉のように

505　死者が、負傷者が大量に出ました

馬のひずめで多くの歩兵が死にました
エクトルは良く戦い、臣下たちも良く戦いました
そしてギリシャ人たちも立派に男らしく見えました

506　トロヤ人の中に高貴の出の男がいました
―アルフィオンの息子でとても高い格式の家柄の出身の男でした―
彼はギリシャ人たちに非常に大きな損害を与えていました
自分の目標を確実に実行しようとしていたのです

507　彼にアヤス・エル・テラモンが近ずいて
槍が心臓の中心を貫きました
鎧も全然役に立たず
すぐに魂が彼から出て行きました

508　このことはアンティフォを悲しませ、復讐しようと思いました
アヤスを殺すために力を込めて槍を投げましたが
彼がうまく身をかわしたので命中しませんでした
槍はクルコンを傷つけ、死なせました

509　君主メナラオは負傷したので
怒れる獅子のように怒り狂っていましたが
頭には素晴らしい兜をかぶっていました
戦場でパリスから奪っものです

510　いかに大恥を掻かされたのか
いかに大きな恥辱にまみれているのかを思い

手に槍を取りデモフォンタを殺しました
勇敢な騎士でとても重要な人物でした

511　デモフォンタは自分の武器の上に死んで横たわっていました
倒れる時に首筋がねじれました
ウンブラシデスが死体から剝ぎ取るために近付きましたが
この罰当たりはうまく行きませんでした

512　彼は鎧を剝ぎ取るために頭を傾けていました
その上に梁と同じくらいの大槍が飛んできました
トアスが愛人のためにそれを投げたのです
槍はその悪党を地に這わせました

513　トロヤの人々の多くが倒れました
ギリシャ人の多くも命を落としました
血の川が遠くまで流れていきました
人々は死を恐れませんでした、それほど興奮していたのです

514　各々が勝つために
過度な事をしたので倒れることになりました
しかしトロヤ人が非常な戦いぶりだったので
ギリシャ人は引き返さなければなりませんでした

515　ディオメデスは仲間が逃げ出すのを見ると
トロヤ人たちに襲いかかり多くの者を殺し
好むと好まざるとにかかわらず彼らを敗走させたのです

このようにオオカミが羊にするように彼らを殺しました

516　腕をうまく動かして致命的な打撃を与え
大物の王子たちの一団を殺しました
もし彼に彼自身のような他の者たちの助けがあったら
トロヤ人たちに甚大な損害を与えていたでしょう

517　彼は腹をすかした獅子のように怒り狂っていました
獅子が空腹に苦しんでいるとき、子ヤギを見つけたら
情け容赦なくで噛み砕いて首を切り落とします
パラスとユーノはとても喜んでいました

518　トロヤ人たちは退却を余儀なくされました
ディオメデスは彼らを追い、大きな打撃を与えました
彼らはパラスを悪いときに見たと言い
エレナの話が広まらないように願いました

519　あなたたちが知っているように、ウンブラシデスを殺したトアスは
壁のようにしっかりした息子を二人持っていました
運悪くディオメデスが彼らを見て
《くたばれ》と言って襲いかかりました

520　彼は槍を構え、鞍にしっかり腰を据え
兄の方の胸の真ん中を突くと
穂が背中の真ん中を突き抜けました

これは今日ギリシャでは語り草になっています

521　弟の方がこれを見ると
闘牛の前に出ました
もし少しでもディオメデスと対決しようと望んだら
彼が兄にしたのと同じ事をしたでしょう

522　弟は巣を奪われるときのカラスのような様でした
防ぐことができず、叫び声を上げるのです
弟イドゥスはこのように気落ちしていて
兄を失った怒りで気が変になっていました

523　兄がひどい目に遭ったのを見ましたが、助けることができませんでした
望んでも彼に救いの手を差し伸べることはできなかったのです
ウンブラシデスを殺したトアスは
喜びが全部悲しみに変わりました

524　アガメノン王は非常な高位にありましたが
後衛につこうとも、脇につこうともしないで
最前線で戦闘に加わりました
彼の行くところに人々は道を空けました

525　不運なトロヤ人ロデウスは
非常に大胆にもアガメノンと渡り合いました
王は彼の右の脇腹に非常な傷を負わせ

冷たくなった彼の死体を地面に放置しました

526　この他に王は五人の皆勇敢な男たちを殺しました
みな非常な力量の、高貴の血筋でした
最後にはエウリピロの歯の真ん中を突き刺しました
王はトロヤの人々にこのような悪さをしたのでした

527　メナラオを負傷させたパンダルスは
弓を構えてさまよい
敵の軍の中にディオメデスを求めて進んで行きました
というのは彼の陣営に甚大な損害を与えていたからです

528　パンダルスは、神が苦しみを与えんことを、ディオメデスを見つけました
彼が激しく戦っている場所で
パンダルスは胸に向かって矢を放ちましたが、
幸いにも外れました
肩に当たったのです、残念ながら

529　ディオメデスが負傷したと気づいたとき
誰にやられたのか分からなかったので、侮辱されたと思いました
非常に怒りに燃えたので
飢えて怒れる熊のようでした

530　ディオメデスは自分に投げ矢を投げた射手を探して
多くの者を殺し、多くのひどい破壊行為をしました

罪業から自分の道に立ちはだかる者は
決して己の城には戻ることはないのです

531　五人の皆高貴な子爵を殺しました
—ホメロスが言う皆名だたる者たちです—
最後に前に話したトアスを
—思うに、その間に他の者たちを襲ったのです—

532　パンダルスに目を留めました、彼を方陣の中に見て
突進しました、—他の事を全て置いて—
頭の真ん中に剣で一撃を加え
真っ二つにしました

533　この呪われた者はこのような懲らしめをしたので
だれもあえて対決しようとする者はいませんでした
彼は受けた侮辱に対して十分に復讐していなかったのです
矢の傷の不快さを忘れることができませんでした

534　為し得たことにかかわらず、彼は退却しようとしませんでした
十分に満足していおらず、まだ狩りをしたかったのです
その日を、誰かくれるならば、待っていました
しかし誰もあえて彼の前に出ようとはしませんでした

535　ついにエネアスと見えることになりました
アンキエセス王の息子で、敬うべき人物です
すぐに打ち負かすか殺そうと思いました

エネアスは彼に答えました：《簡単には行かないぞ》

536　槍で渡り合いましたが、負傷させることはできず
四回も同じことを繰り返しました
ディオメデスは槍が折れると
鞘から必殺の剣を抜きました

537　エネアスはそれにもかかわらずひるみませんでした
剣を手に取って、彼に向かって行こうとしました
両者とも十分に防御を知っていました
どうしてもお互いに傷を負わせることはできませんでした

538　二人とも呪われた悪魔のようでした
お互いすざましく睨み合って
両方の側から皆が叫び声を上げていました
馬の鼻はふいごのようでした

539　ディオメデスがエネアスを倒せないし
どうしても勝てないと分かると
自分が身動きが取れないと思い、どうしたらいいか考えました
エネアスをそのままにしておくのは自分の恥だと思ったからです

540　ディオメデスは斜面の近くに大きな石が横たわっているのを見ました
それは十二人の騎士でも持ち上げることのできないものでした
彼は馬を下りてそれを取りに行きました

エネアスは彼がそれを動かせないだろうと思っていました

541　ディオメデスはそれをいとも軽々と持ち上げ
それでエネアスの腹の上を打ち
鞍からみっともなく放り出しました
もう少しでエネアスは死ぬところでした

542　エネアスが地に倒れるとすぐ
ディオメデスは石を取り戻すために飛んで行き
マントでも持ち上げるようにそれをたやすく持ち上げました
もしそれが彼を傷つけていたら魔法も彼を救えなかったでしょう

543　エネアスの母ビーナスは魔法を知っていました
彼女は雲を湧かせ風を吹かせました
彼女は息子の血だらけの首筋を見
彼の埃にまみれた髪が地面に散らばっているのを見ました

544　ディオメデスが彼に襲いかかる前に
悪魔ビーナスが彼に魔法をかけ
霧で彼の目を見えなくしました
エネアスはそれで逃げることができたのです

545　ディオメデスは見えなかったけれど、非常に敏捷でした
誰かトロヤ人を襲撃できるか手探りし
偶然にもビーナスを手で襲いました
その一撃は多くの者に大打撃を与えました

546　ビーナスは傷を負い、恥をかかされたと思い
ジュピターに不平を言い、彼に傷を見せました
もしユーノがいなければ、ギリシャ軍は
疑いなく悲惨な結果になっていたでしょう

547　数日でエネアスはすっかり回復しましたが
敗北を忘れませんでした
かつてないほど怒り、戦闘に戻り
怒れる男として活躍しました

548　皆が新たに始めるように戦い出しました
多くのギリシャ人たちがそこで死ぬことになりました
切れなくなった剣は捨てました
しかし誰も休もうとしませんでした

549　エネアスは負った傷の怒りで
獰猛な蛇のように怒り狂っていました
戦場を自分を傷つけたギリシャ人を探し回って
見つけたら復讐してやろうと思いました

550　皆断固としていて、戦いはすざましいものでした
地面はすべて死体で覆われていました
人々はほとんど足の半分まで血に浸かって歩いていました
ベローナ[45)]がこんなに目を見張っていた日はありませんでした

551　皆の間にエクトルが火をつけて

仲間の者たちを指揮し、他の者たちを襲って歩いていました
彼を見た者は皆彼の前から逃げて行きました
彼が捕らえることができた者は彼に感謝しようとはしませんでした

552　エクトルは獰猛な虎のように怒り狂っていました
捕らえた者はやすやすとは逃げられませんでした
彼の指揮する素晴らしい臣下たちは
皆彼が声をかけただけで勇気を奮い起こしました

553　ギリシャ人たちは劣勢で、耐えることができず
不承不承退却しなければなりませんでした
エクトルは彼らに襲いかかり、休む間を与えませんでした
彼らはトロヤから１日行程の所に離れていたかったのです

554　ギリシャ人たちの王は疲れていましたが
これを見ると非常に不機嫌になり
言いました：《あり得ないことだ、悪魔には悪いが
私たちは苦しくとも、戦場を征するのだ》

555　こう言うと軍の中に入って行き
《神様、お助けを》と叫びながら猛攻を仕掛け
戻って来ない者たちを面と向かって侮辱しました
彼らに言いました：《友たちよ、なぜ私を辱めるのか》

556　その対決はトロヤ人たちにとっては辛いものでした

まったく彼らの意に反したものになったのですから
ギリシャ人たちは活気づき帰還しました
戦いは大混乱になりました

557　良き王アガメノンは復讐をして歩きました
ある者たちは殺し、他の者たちは負傷させて
皆悪魔から逃れるように、彼の前から逃げて行きました
追いつかれた者はあまり笑っていませんでした

558　エクトルはもう一方の側でトロヤ人たちと共に戦っていました
ずっと手を封じられていたわけではありませんでした
彼とエネアスの二人の強者は
兄弟のように良く助け合っていました

559　誰も彼も皆激しく戦っていました
しかしお互いに降参することはありませんでした
川も牧場（まきば）も皆血を吹き出して
攻撃を受けて防御柵が揺れていました

560　戦いはどちらの側にも傾いていませんでした
誰もどうしても勝ちを納めることができないでいました
そうした時メナラオはアダストロを捕らえました
彼はチーズのような白い頭髪をしていました

561　トロヤ人の若い騎士カルペドンは
―彼はジュピターの息子で、彼に似ていましたが―

トリトラノ[46]を倒し、腹に傷を負わせました
ウレクシスは復讐するため、すぐに彼に襲いかかりました

562　カルペドンは負傷して天幕に向かいました
狡猾なウレクシスは戦闘をかき乱し
五人の若者を殺しました、皆非常な戦士でした
―彼が、伝説が言うように、最悪ではありませんでした―

563　エクトルとディオメデスは両者とも怒りに駆られ
断固として勇敢に戦場に留まっていました
二人は分別のある人間のように仲間を励ましていました
どちらがより立派かと言うことは難しいでしょう

564　彼らは強情なイノシシのようでした
牙は研ぎ澄まされ、唇から泡を吹いていました
剛毛を逆立て、肩を構えて
お互いに激しく攻撃し合っていました

565　運命はもっと走る
風より羽より鞍を置いた駄馬よりも、とことわざが言うように
ギリシャ人たちは頑張って攻撃しました
トロヤ人たちは彼らに戦場を明け渡さなければなりませんでした

566　その時エクトルは自分たちは欺されていて
すべての神々がギリシャ人の側についてしまったことが分かりました

トロヤ人は、とにかく、神々を不快にしてしまい
そうでなければこんなに困ったことになってないだろうと

567　エクトルは町に入り、会議を招集し
事態がどうなっているのか仲間に分からせました
教会で徹夜で祈り、
供え物をするように命じました、必要なので

568　トロヤの婦人たちはすぐにろうそくを灯し
皆粗末な苦行衣をまとい
祭壇をバラと百合で飾りました
聖人たちを満足させるために、すべての人がキリエ[47)]を歌いました

569　エクトルの妻はアンドロナという名でしたが
―彼女に会った人は皆彼女のことを良く言っていました―
夫が殺されるのではないかと恐れていました
悪い夢がいつも彼女を苦しめていましたから

570　息子アステミアータを腕に抱き
父のところに連れて行くと、息子は悲しみで泣きました
息子にキスしようとしましたが、少年は拒みました
その場にいた者たちは皆悪い兆候だと思いました

571　このことはエクトルの気を重くし、とても不愉快になりました
毛が逆立ちましたが、恐怖のためではありませんでした

賢明な妻が彼に言いました
子供は甲冑が恐かったのだと

572　エクトルはすぐに兜を脱ぎ、顔を表すと
子供は父だとわかり、近寄ってキスしました
エクトルはこのように言いました：《息子よ、これは嬉しい、
神がお前を立派な男にしてくださるように、私は戦列に戻るのだから》

573　そうこうするうちのグラウカスは不運に見舞われました
戦いの中でディオメデスと遭遇したのです
彼を必ず倒せると思い
盾の真ん中を激しく攻撃しました

574　ディオメデスは優秀で、非常に節度がありました
それ故何もせず、平然としていました
彼は言いました：《友よ、君は欺されたと思う
私のことを知っていたら、私を攻撃しなかったろうから

575　しかし私は今回は君を許し、大いに愛する
なぜなら私が誰だか知らなかったのだから
もし再びこのような事が起これば、後味の悪いことになりますよ
グラウカスは彼に言いました：《そうなることを創造主が喜ばれないように》

576　エクトルは仲間すべてから別れました

このことを皆は良い事だと思いませんでした
弟の山の住人パリスが彼と共に
戦列に戻り激しく戦いました

577　エクトルはいつものように、すぐ攻撃にかかり、
できる者はすべて鞍から引きずり落とし始めました
彼の穂先から一旦逃れた者は
彼の前には再び進んで現れようとはしませんでした

578　テラモンの息子アヤスがエクトルと対決しました
彼については前に言及しました
大きな心の持ち主で貴重な騎士です
エクトルは彼と任務として渡り合いました

579　エクトルは彼に気付き待っていました
誰でも彼があまり恐れていないことが分かったでしょう
アヤスは馬に乗って全速力で駆けつけて来て
力一杯エクトルの盾に攻撃をしかけました

580　エクトルは落ち着いて彼を突き刺そうとしました
アヤスは気づきうまく身を守りもることができました
エクトルがこれを見ると猶予を与えようとせず
彼を攻め、首を切り落とそうとしました

581　アヤスはエクトルの方を向きました―逃げようとはしませんでした―

剣を手にエクトルに向かって行きました
両者共に身を守ることをよく知っていて
どうしてもお互いを負傷させることはできませんでした

582　エクトルの考えていることはアヤスはよく知っていて
アヤスもエクトルもどうもできませんでした
アヤスには彼の計略は全然効き目がなく
彼らのどちらも望みを遂げることはできませんでした

583　アヤスは狡猾で卑しい出でした
彼はエクトルの首筋の真ん中を狙おうとしました
しかしエクトルは、ホメロスが言うように、身を守りました
しかしアヤスはエクトルの鎧を少し傷つけました

584　アヤスは肩先にわずかな傷を負わせ
そこから鎧の四つの輪をもぎ取りました
傷は肉まで届き、鮮血を流させました
エクトルは言いました：《この血はちゃんと君に降りかかること
になるだろう》

585　エクトルは剣を鞘に収め
とてつもなく大きな石を落とし
アヤスの頭の真ん中に当たるようにしました
しかしアヤスは盾を途中に置きました

586　すぐにエクトルは対抗し、もう一度石をつかみました

たくましかったので、いともたやすくそれを取り
防備のない兜の先をめがけて投げつけると
アヤスは地に倒れました、タールより黒くなって

587　エクトルはもう一度石を取りに行きました
名誉ある騎士であるアヤスを殺すために
もし彼に当たれば事は解決するでしょう
投石機のような力で投げつけたのだから

588　エクトルはすでに石を持ち上げようとしていました
アヤスは目を上げて自分に投げつけようとしているのを見ました
苦痛は老婆を走らせると言われるように
アヤスは恐怖に駆られ石を摑みに行きました

589　両者は断固として戦い始めました
アヤスは恐怖のあまり倒れるわけにはいきませんでした
この事が神の気に入り、夜が助けに入りました
仲裁者たちが戦いを止めるように命じました

590　闘牛たちはやめることになり
両者から汗が止めどなく流れていました
人々は両者を常に最高の人物と見なしました
しかしアヤスにはこの戦いがいつまでも心に残りました

591　エクトルは別れる時にアヤスに尋ねました
《なあ騎士よ、神が君を祝福せんことを

君はどの家柄の出なのか、どうか良い生涯を送るように
君の戦功を私が良く理解できたと良いんだが》

592　アヤスは言いました：《それについては説明しましょう
私は非常に高貴な両親を持ちました、死んでしまったけれども
母はエシオナ、父はテラモンで
私の生まれた所はギリシャの中部です

593　二人は自分たちが非常に近い血縁であることを発見し
剣を交換し、友情を結びました
彼らはより忠実であるためにお互いの右手をぶつけ合い
お互い別れて、自分の所に帰りました

注

42）当時女子修道院などなかったので、後世の創作によるもので、実際はアキレスを女装させてリコメデス王の宮廷に送った
43）この部分スペイン語化されたラテン語 Deo graçias、正しくは Deo gratias
44）テラモンの息子のこと
45）ローマの戦いの女神
46）ヘラクレスの息子
47）ギリシャ語 *κύριε* で「主よ」の意。ミサ通常式文中の *Κύριε, ἐλέησον*「主よ、あわれみたまえ」から

参考図書・辞書

Libro de Alexandre　Real Academia Española　Madrid　2014
Libro de Alexandre　Nueva Biblioteca de Erudición y Crítica　Editorial Castalia　Madrid　2007
Libro de Alejandro　Editorial Castalia　Madrid　1985
Book of Alexander　Peter Such and Richard Rabone　Oxbow Books　Oxford　2009
Vocabulario de Libro de Alexandre　Anejos del Boletín de la Real Academia Española　Madrid

1976
アレクサンドロスの書・アポロニオの書　橋本一郎　大学書林　1991
Diccionario Medieval Español　Martín Alonso Universidad Pontificia de Salamanca　1986
Diccionario de Castellano Antiguo　Manuel Gutiérrez Tuñón　Editorial Alfosípolis　2002
Tentative Dictionary of Medieval Spanish　Lloyd A. Kasten and Florian The Hispanic Seminary of Medieval Studies　New York　2001
Larousse Universal　diccionario enciclopédico　Librairie Larousse　París　1968